

綱、大力ノ勇者ニテ、手勢二千人ニテ、三寶院ノ門ノ片扉ヲ開キ、切テ入勢ヲ防留ヨト、卯刻ヨリ申ノ終迄、十餘度迄追出ケリ、然共大勢ハ皆ウタレ、基綱一人踏止テ防ギケル、爰ニ紀州熊野ノ侍ニ、野老源三下云者有、奥三山ニ隱ナキ、大力ノ剛ノ者有ケルガ、爰ナル敵一人ニ、アマタノ味方ウタレ無念也、某シ組留テミセント進ヨリテ、太刀下ヘツトヨリ、打物加瀝ト捨テ、手ヲハダケテ飛付ケリ、基綱是ヲ見テ、コレハ鎧物具ノ實ヲタメシテ、二兩モ著タレバコソ、カクハ振舞ラン、甲ヲ打破テステント、少飛ノキテ、惡キ敵ノ振舞哉、捨太刀一ツ受テ見ヨト云マ、振アグテ丁ト打ツ、三枚重ノ鐵甲ノ、磐石ノ如クナルヲ打破リ、手對シテ、七尺三寸ノ御所焼ト云太刀ノ、ハヤキ本ヨリ打折テ、基綱手ヲ失ヒ、牛ノタケルガ如ク匂テ、飛ノキケレドモ、敢テ追カクル者ナシ、野老源三ハ打居ラレテ、目口一ツニ血ニ成テ死ニケリ、

〔北條五代記九〕三浦介道寸父子滅亡の事

荒次郎浦[○]三は廿一歳、器量こつがら人にすぐれ、長七尺五寸、黒髮有て血眼なり、手足の筋骨あらあらしく、八十人が力をもてり、さいごの合戦のため、おどし立たる甲冑は、鐵をきたひ、あつさ二分にのべ、是を帶し、恐らかしの丸木を、一丈二尺につゝきり、八角にけづり、筋がねをわたし、此棒を引さげ、一人門外へゆるぎ出たる有様、やしやらせつのごとし、おめきさけぶこそ、太山もくびれて海に入、こんぢくもおれて忽に沈がごとし、四方八方へ逃る者を、つ詰、甲の頭上をうてば、みぢんにくだけて胴へにえ入、まこ手にうてば一拂に五人十人打ひしぐ、棒にあたりて死する者五百餘人、其戸は地にみちて、足のふみ所もなし、たゞ是らせつこぐの鬼王がいかりもかくやぢん、此威に皆敗北して敵もなければ、みづから首をかき落し死たりけり、

〔志士清談〕豐後白杵ニ吉田一祐ト云者アリ、力片手ヲ以テ百斤ヲ舉ニ重シトセズ、鎧ハ銃玉モ穿ツヨト不能ヲ著、二尺七寸ノ腰刀、一尺八寸ノ短刀、厚サ三寸半ニ作テ、刃ハ蛤貝ノ耳ノ如ニシテ、